

彙 報

会 長 影 山 太 郎

——常任委員会——

2011年度第2回常任委員会

日 時：2011年10月30日(日)10:00～15:00

場 所：東京大学日本語教育センター（東京都文京区本郷）

出席者：影山太郎（会長）、井上 優（事務局長）、荻野綱男、菊地康人、久保智之、郡司隆男、田野村忠温、長谷川信子、早津恵美子、吉田和彦（以上常任委員）

オブザーバー：窪菌晴夫（編集委員長）、遠藤喜雄（大会運営委員長）、坂本 勉（広報委員長）、加藤重広（夏期講座委員会委員長）、高田智和、千葉庄寿（以上事務局委員）

[報告事項]

- (1) 前回評議員会以降の主な活動について
 - ・2011年度第1回評議員会（2011年6月18日）以降の主な活動（恒常的業務を除く）が報告された。
 - ・東日本震災の被災会員に対する会費免除の実施について報告がなされた。
- (2) 組織・役員・任期について
 - ・2011年10月現在の組織・役員・任期について確認がなされた。
- (3) 科学研究費研究成果公開促進費について
 - ・日本学術振興会による実地検査と意見交換が、2011年10月21日（金）13:30～15:30に事務支局（中西印刷学会フォーラム）において実施され、会長、事務局長、事務支局で対応したことが報告された。
- (4) 2011年以降の大会について
 - ・以下の予定が報告された。
 - 第143回大会（2011年秋季大会）：2011年11月26日（土）～27日（日）、大阪大学豊中キャンパス（大会実行委員長：上田功氏）

- 第144回大会（2012年春季大会）：2012年6月（予定）、東京外国語大学（大会実行委員長：峰岸真琴氏）
 - 第145回大会（2012年秋季大会）：2012年11月（予定）、九州大学箱崎キャンパス（大会実行委員長：久保智之氏）
- (5) 各委員会・小委員会報告
 - ・編集委員会、大会運営委員会、広報委員会、夏期講座委員会については本彙報の各委員会の項目を参照。
 - ・論文賞小委員会より2011年度日本言語学会論文賞の授賞候補論文の選考経過について報告がなされた。
 - ・発表賞小委員会より第143回大会（大阪大学）発表賞の審査の準備状況が報告された。
 - (6) 2011年度日本言語学会論文賞について
 - ・会長より、論文賞選考小委員会からの推薦に基づいて、2011年度日本言語学会論文賞の授賞論文2編を決定したことが報告された。
 - 内藤真帆「ツツバ語の移動動詞と空間分割」（『言語研究』136号）
 - 中川聡「Synchronic and Diachronic Aspects of Nominative and Accusative Absolutes in English」（『言語研究』139号）
 - (7) Journal@rchiveについて
 - ・学会ホームページからJournal@rchive公開論文へのリンク作業を行っていることが報告された。
 - (8) 言語の多様性に関する啓蒙・教育プロジェクトについて
 - ・現在実施中のプロジェクトの進捗状況と今後の見通しについて報告がなされた。
 - ・プロジェクト終了後に、評議員会に成果を報告し、評価は次期会長が行うことが確認された。
 - (9) 言語系学会連合について
 - ・当初計画を予定していた言語系学会連合主催のシンポジウムは開催しないこと、12月23日に言語系学会連合意見交換会を実施することが報告された。

[審議事項]

- (1) 「特別顧問」の廃止について
- ・池上二良特別顧問の逝去にともない、2012年3月31日をもって「特別顧問」を廃止すること、会則から「特別顧問」に関係する部分を削除することが承認された。
- (2) 選挙細則の改定について
- ・選挙細則「D 選挙管理上の事務的注意」から「4 大封筒に通し番号を打つ。」を削除することが承認された。【別記1参照】
- (3) 『言語研究』執筆要項の改定について
- ・『言語研究』執筆要項のうち、日本語のローマ字表記に関する部分を改定することが承認された。【別記2・3参照】
- (4) 「公開講演と公開シンポジウムの謝金その他の支払いに関する申し合わせ」の改定について
- ・標記申し合わせの「3. 演者が非会員であっても元会員である場合は、会員に準ずるものとする」を削除することが承認された。
- (5) 論文賞・発表賞選考小委員会委員について
- ・2012年度の論文賞選考小委員会、発表賞選考小委員会の委員の選出については次期会長に一任することが確認された。
- (6) 学会ホームページ掲載の『言語研究』論文の扱いについて
- ・学会ホームページで公開されているPDFファイルに記載された論文著者のメールアドレスについて、著者から削除の要望があったときには、広報委員会のほうで削除することが確認された。
- (7) 『言語研究』掲載論文の転載通知について
- ・『言語研究』掲載論文の転載通知のための書式を用意することが確認された。
 - ・『言語研究』掲載論文の機関リポジトリへの登録について、(1) 1件ごとに事前に「機関リポジトリ登録許諾依頼書」を提出してもらうこと、(2) 『言語研究』掲載から1年未満の論文のリポジトリへ

の登録は許可しないこと、(3) Journal@rchiveで公開されている論文のPDFファイルをダウンロードしてリポジトリに登録することは許可しないことが確認された。

(8) その他

- ・『言語研究』彙報の「所属先変更」には、所属機関のみを記載することを確認した。

——評議員会——

2011年度第2回評議員会

日時：2011年11月26日(土)10:30～12:30

場所：大阪大学言語文化研究科大会議室

出席者：影山太郎（会長）、加藤重広（夏期講座委員長）、佐々木冠、小泉政利、後藤 斉、堀江 薫、池田 潤、伊藤たかね、井上 優（事務局長）、上野善道、大津由紀雄、風間伸次郎、熊本 裕、坂原 茂、杉浦滋子、玉岡賀津雄、角田太作、西山佑司、長谷川信子、早津恵美子、松村一登、峰岸真琴、佐久間淳一、清水克正、庄垣内正弘、新田哲夫、梶 茂樹、金水敏、窪菌晴夫（編集委員長）、定延利之、佐藤昭裕、武内紹人、田野村忠温、野田尚史、藤代 節、三原健一、吉田和彦、塚本秀樹、辻 星児、上山あゆみ、江口正、久保智之、坂本 勉（広報委員長）（評議員出席者42名）

委任状：22名

オブザーバー：遠藤喜雄（大会運営委員長）、田窪行則（会計監査委員）、上田 功（第143回大会実行委員長）、高田智和、千葉庄寿（事務局委員）

[報告事項]

(1) 第143回大会について

- ・会長より開催校である大阪大学に対する謝意が表された後、大会実行委員長の上田功氏より挨拶があった。

(2) 前回評議員会以降の主な活動について

- ・2011年度第1回評議員会（2011年6月18日）以降の主な活動（恒常的業務を除く）が報告された。

- ・東日本大震災の被災会員に対する会費免除の実施について報告がなされた。
- (3) 組織・役員・任期について
 - ・2011年11月現在の組織・役員・任期について確認がなされた。
- (4) 役員選挙について
 - ・役員選挙の準備状況が報告された。2012年12月初旬：選挙人名簿送付，2012年12月中旬：投票用紙送付，2012年1月20日：投票締切，2012年1月29日：開票
- (5) 科学研究費研究成果公開促進費について
 - ・日本学術振興会による実地検査と意見交換が，2011年10月21日（金）13:30～15:30に事務支局（中西印刷学会フォーラム）において実施され，会長，事務局長，事務支局で対応したことが報告された。
- (6) 2011年以降の大会について
 - ・以下の予定が報告された。
 - 第143回大会（2011年秋季大会）：2011年11月26日（土）～27日（日），大阪大学豊中キャンパス（大会実行委員長：上田功氏）
 - 第144回大会（2012年春季大会）：2012年6月（予定），東京外国語大学（大会実行委員長：峰岸真琴氏）
 - 第145回大会（2012年秋季大会）：2012年11月（予定），九州大学箱崎キャンパス（大会実行委員長：久保智之氏）
 - ・次回大会（144回大会，東京外国語大学）の開催校を代表して峰岸真琴氏より挨拶があった。
- (7) 各委員会・小委員会報告
 - ・編集委員会，大会運営委員会，広報委員会，夏期講座委員会については本彙報の各委員会の項目を参照。
 - ・論文賞小委員会より2011年度日本言語学会論文賞の授賞候補論文の選考経過について報告がなされた。
 - ・発表賞小委員会より第143回大会（大阪大学）発表賞の審査の準備状況が報告された。
- (8) 2011年度日本言語学会論文賞について
 - ・会長より，論文賞選考小委員会からの推薦に基づいて，2011年度日本言語学会論文賞の授賞論文2編を決定したことが報告された。
 - 内藤真帆「ツツバ語の移動動詞と空間分割」（『言語研究』136号）
 - 中川聡“Synchronic and Diachronic Aspects of Nominative and Accusative Absolutes in English”（『言語研究』139号）
- (9) 論文賞・発表賞選考小委員会委員について
 - ・2012年度の論文賞選考小委員会，発表賞選考小委員会の委員の選出については次期会長に一任することが報告された。
- (10) 言語の多様性に関する啓蒙・教育プロジェクトについて
 - ・現在実施中のプロジェクトの進捗について報告がなされた。
 - ・プロジェクト終了後に，評議員会に成果を報告し，評価は次期会長が行うことが報告された。
- (11) 『言語研究』掲載論文の転載通知について
 - ・『言語研究』掲載論文の転載通知のための書式を用意したことが報告された。
 - ・『言語研究』掲載論文の機関リポジトリへの登録について，(1) 1件ごとに事前に「機関リポジトリ登録許諾依頼書」を提出してもらうこと，(2) 『言語研究』掲載から1年未満の論文のリポジトリへの登録は許可しないこと，(3) Journal@rchiveで公開されている論文のPDFファイルをダウンロードしてリポジトリに登録することは許可しないことが報告された。
- (12) Journal@rchiveについて
 - ・学会ホームページからJournal@rchive公開論文へのリンク作業を行っていること，J-STAGEへの移行は継続して検討することが報告された。
- (13) 言語系学会連合について
 - ・当初計画を予定していた言語系学会連合主催のシンポジウムは開催しないこと，12月23日に言語系学会連合意見交換会

を実施すること、2012年は日本語学会が運営委員長と事務局を担当することが報告された。

[審議事項]

- (1) 「特別顧問」の廃止について
 - ・池上二良特別顧問の逝去にともない、2012年3月31日をもって「特別顧問」を廃止すること、会則から「特別顧問」に関係する部分を削除することが承認された。
- (2) 選挙細則の改定について
 - ・選挙細則「D 選挙管理上の事務的注意」から「4 大封筒に通し番号を打つ。」を削除することが承認された。【別記1参照】
- (3) 『言語研究』執筆要項の改定について
 - ・『言語研究』執筆要項のうち、日本語のローマ字表記に関する部分を改定することが承認された。【別記2・3参照】
- (4) 「公開講演と公開シンポジウムの謝金その他の支払いに関する申し合わせ」の改定について
 - ・標記申し合わせの「3. 演者が非会員であっても元会員である場合は、会員に準ずるものとする」を削除することが承認された。

——編集委員会——

- ・『言語研究』140号を9月25日に発行した。(特集論文5編, フォーラム3編, 225ページ)
- ・投稿先アドレスを変更した(10月1日)。
 - 旧 : lsj@nacos.com
 - 新 : gengokenkyu@nacos.com
- ・『言語研究』執筆要項のうち、日本語のローマ字表記に関する部分の改定案をまとめた。

——大会運営委員会——

2011年度第2回大会運営委員会

日時: 2011年9月5日(月)11:00 ~ 16:00
 場所: 大阪大学言語文化研究科
 出席者: 遠藤喜雄(委員長), 斎藤倫明, 三間英樹, 滝浦真人, 玉岡賀津雄, 野村益

寛, 藤代 節, 彭 国躍, 堀田優子, 米田信子(以上大会運営委員), 上田 功(大阪大学:大会実行委員長), 由本陽子(大阪大学:大会実行委員), 井上 優(事務局長)

- (1) 今後の大会予定, シンポジウム企画, 前回大会の反省点等が確認された。
- (2) 143回大会の応募要旨の審査を行い, 口頭発表56件(応募98件), ポスター発表6件(応募7件), ワークショップ5件(応募5件)を採択した。プログラム(7会場)の編成と司会者の人選を行った。
- (3) 143回大会(大阪大学)について上田功氏, 由本陽子氏と打ち合わせを行った。

——広報委員会——

学会ホームページ

- ・学会ホームページにおいて随時必要な情報をアップしている。
- ・英文サイトがほぼ完成した。

——夏期講座委員会——

- ・2011年10月1日に委員が交代した。加藤重広(委員長), 西村義樹(夏期講座2012実行委員長), 橋本喜代太, 堀川智也, 佐久間淳一, 下地理則。
- ・夏期講座2012実行委員を決定した。西村義樹(実行委員長), 小林正人(東京大学言語学研究室), 長谷川明香(東京大学大学院生)。
- ・夏期講座2010から夏期講座2012への事務引き継ぎを2011年8月8日に行うとともに, 会場及びウェブサイトの準備を進めている。
- ・夏期講座2012(2012年8月20日(月)~8月25日(土), 東京大学文学部)の開講科目と講師が確定した。
 - 〈初級〉音声学(齊藤純男), 生成文法(平岩健), 形式意味論(蔵藤健雄)
 - 〈初中級〉対照言語学(鷲尾龍一), フィールド言語学(呉人恵), 実験言語学(小野創),

歴史言語学 (吉田和彦)

〈中上級〉生成文法 (渡辺明), 社会言語学 (真田信治), 形態論とレキシコン (影山太郎), 認知言語学 (本多啓), 日本語文法論 (白川博之)

- ・夏期講座 2014 は, 佐久間淳一委員を実行委員長として名古屋大学で実施する予定。

——小委員会——

論文賞選考小委員会

- ・論文賞の授賞候補の選考手順について検討した。(2011年7月4日(月), 東京大学大学院総合文化研究科)
- ・2011年度日本言語学会論文賞の授賞候補論文の選考及び会長への推薦を行った。

発表賞選考小委員会

- ・発表賞の授賞候補の選考手順について検討した。(2011年8月8日(月), 学士会館)
- ・第143回大会(大阪大学)発表賞の審査対象と審査の手順を決定した。(2011年11月6日(日), 学士会館)
- ・第143回大会発表賞の受賞候補発表を選考し, 会長への推薦を行った。(2012年1月7日(土), 学士会館)

——事務局——

科学研究費研究成果公開促進費実地検査と意見交換

日 時 : 2011年10月21日(金) 13:30 ~ 15:30

場 所 : 中西印刷 NACOS 学会フォーラム

出席者 : 日本学術振興会担当者(2名), 影山太郎(会長), 井上 優(事務局長), 糸魚川共子(NACOS学会フォーラム(事務支局))

- (1) 日本学術振興会担当者による関係文書確認の後, 実施体制に関する質疑応答がなされた。問題点の指摘はなし。
- (2) 科学研究費研究成果公開促進費に関する意見交換がなされ, 言語系学会連合の活動もふまえて, 言語学会としての意見

を日本学術振興会担当者に伝えた。

その他

- ・言語系学会連合(UALS)事務局として, 第2回意見交換会を開催した。(2011年12月23日(金・祝) 13:15 ~ 16:00, 関西学院大学梅田キャンパス)
- ・事務支局とともに次期役員選挙の準備作業を行った。
- ・学会ホームページから Journal@rchive 公開論文へのリンク作業は2012年3月までに完了する予定。

【別記1】選挙細則「D 選挙管理上の事務的注意」の改定

(旧)

- 1 投票用紙は会長用、編集委員長用、会計監査委員用および評議員用を別紙とし、かつ、色をかえる。
- 2 会計監査委員用および評議員用の投票用紙は、1名ずつ切り離せるようにミシンを入れる。なお、契印・検印はしない。
- 3 小封筒と大封筒は透けて見えないような紙質のものを選ぶ。
- 4 大封筒に通し番号を打つ。
- 5 大封筒に日本語学会選挙管理委員会の宛名、「投票用紙在中」、「切手貼付」の文字を印刷する。
- 6 会員に投票用紙と選挙人名簿を送る時、次のことを知らせる。
 - a) 各地区の評議員定数
 - b) 同一会員を会長、編集委員長、会計監査委員および評議員の4者の候補者として投票することができる。
 - c) 評議員候補の割当地区は、当年度10月末日現在の会員原簿の住所による。
 - d) ○年○月○日までに投函する。(当日消印のものは有効)
 - e) 「会則 第4章 役員の兼任」、「選挙細則 A. 投票の方法、B. 投票が無効になる場合」を同封する。

(新)

- 1 投票用紙は会長用、編集委員長用、会計監査委員用および評議員用を別紙とし、かつ、色をかえる。
- 2 会計監査委員用および評議員用の投票用紙は、1名ずつ切り離せるようにミシンを入れる。なお、契印・検印はしない。
- 3 小封筒と大封筒は透けて見えないような紙質のものを選ぶ。
- 4 大封筒に日本語学会選挙管理委員会の宛名、「投票用紙在中」、「切手貼付」の文字を印刷する。
- 5 会員に投票用紙と選挙人名簿を送る時、次のことを知らせる。
 - a) 各地区の評議員定数
 - b) 同一会員を会長、編集委員長、会計監査委員および評議員の4者の候補者として投票することができる。
 - c) 評議員候補の割当地区は、当年度10月末日現在の会員原簿の住所による。
 - d) ○年○月○日までに投函する。(当日消印のものは有効)
 - e) 「会則 第4章 役員の兼任」、「選挙細則 A. 投票の方法、B. 投票が無効になる場合」を同封する。

(2011年11月改定)

【別記2】『言語研究』執筆要項「4 特殊文字ならびに日本語のローマ字化」の改定

(旧)

- 4 特殊文字ならびに日本語のローマ字化：
 ギリシア文字・キリル文字以外の特殊文字はローマ字化する。音声字母は可能な限り国際音声学協会所定のもの（最新のもの）を用いる。造字を要する特殊文字は、必要不可欠の場合を除き、避ける。
日本語のローマ字化はひとつの方式（例えば、訓令式、ヘボン式）を統一的に使用する。

(新)

- 4 特殊文字ならびに日本語のローマ字化：
 ギリシア文字・キリル文字以外の特殊文字はローマ字化する。音声字母は可能な限り国際音声学協会所定のもの（最新のもの）を用いる。造字を要する特殊文字は、必要不可欠の場合を除き、避ける。
欧文論文における日本語のローマ字化は次の方針に従う。

- a. 例文については訓令式を用いる。

例 zibun (自分), bunpoo もしくは bunpō (文法)

- b. 参考文献(欄)については下記の①～

③を除き、ヘボン式を用いる。

例 Kindaichi (金田一), ...ni tsuite (…について)

- ① 固有名詞については、慣例に従う。

例 Gengo Kenkyu (『言語研究』), Takesi Sibata (柴田武), S.-Y. Kuroda (黒田成幸), Mamoru Saito (斎藤衛), Kurocio (くろしお出版), Hituzi Syobo (ひつじ書房), Tokyo (東京) [地名], Osaka (大阪) [地名]

- ② 撥音の「ん」には一貫してnを用いる。

例 bunpoo (文法), onbin (音便)

- ③ 長音は固有名詞の場合には母音字の上に横棒(マクロン)を付し、固有名詞以外ではマクロンを用いた表記か、同じ母音字を続けて書く表記を用いる。

例 Ono (小野), Ōno (大野), Satō (佐藤), hoogen, hōgen (方言), kenkyuu, kenkyū (研究)

(2011年11月改定)

【別記3】『言語研究』執筆要項「6 注および参考文献」の改定

[左ページ：改定前，右ページ：改定後]

(旧)

- 6 注および参考文献：注は通し番号を付け、論文末に別紙にまとめる。参考文献は、本文または注において引用または言及されたもののみを、次の形式に従って論文末に別紙にまとめる。
- 項目は第1著者のアルファベット順に並べる。
 - 同一著者の文献は発表年の順に並べる。
 - 同一著者の同一年の文献には a, b, c などの添字を付ける。
 - 同一の単行本から複数の論文が引用されている場合には、単行本を編者名による1つの項目として立て、各論文はそこへの参照とする。
 - 著（編）者名は、N. S. Trubetzkoy, R. H. Robins のように慣例的な場合を除き、フルネームを使用し、イニシャルを用いない。
 - 各項には、著（編）者名、発行年、論文名、頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する。

【雑誌論文】第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」『雑誌名』巻数：頁数。（巻全体で通しの頁番号が打たれている場合は巻数だけで、号数は不要。号ごとに頁番号が付けられている場合のみ、巻数と号数を記す。）

例 佐久間鼎（1941）「構文と文脈」『言語研究』9: 1-16.

例 服部四郎（1976）「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2-14.

例 Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.

例 Kay, Paul and Chad K. McDaniel (1978) The linguistic significance of basic color terms. *Language* 54: 610-646.

【論集などに所収の論文】第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」編者名（編）『論文集名』頁数。出版地：出版社。

例 金田一京助（1955）「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説』下：727-749。東京：研究社。

例 Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171-202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

【単行本】第1著者名・他の著者名（発行年）書名。（必要な場合は）版、（該当する場合は）シリーズのタイトルと巻号。出版地：出版社。

例 柴谷方良（1978）『日本語の分析』東京：大修館書店。

例 林四郎・南不二男（編）（1974）『世界の敬語』敬語講座第8巻。東京：明治書院。

例 Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

例 Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

(新)

- 6 **注および参考文献**：注は通し番号を付け、論文末に別紙にまとめる。参考文献は、本文または注において引用または言及されたもののみを、次の形式に従って論文末に別紙にまとめる。
- a. 項目は第1著者のアルファベット順に並べる。
 - b. 同一著者の文献は発表年の順に並べる。
 - c. 同一著者の同一年の文献には a, b, c などの添字を付ける。
 - d. 同一の単行本から複数の論文が引用されている場合には、単行本を編者名による1つの項目として立て、各論文はそこへの参照とする。
 - e. 著（編）者名は、N. S. Trubetzkoy, R. H. Robins のように慣例的な場合を除き、フルネームを使用し、イニシャルを用いない。
 - f. 各項には、著（編）者名、発行年、論文名、頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する。

[雑誌論文] 第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」『雑誌名』巻数：頁数。（巻全体で通しの頁番号が打たれている場合は巻数だけで、号数は不要。号ごとに頁番号が付けられている場合のみ、巻数と号数を記す。）

例 佐久間鼎（1941）「構文と文脈」『言語研究』9: 1-16.

例 服部四郎（1976）「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2-14.

例 Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.

例 Kay, Paul and Chad K. McDaniel (1978) The linguistic significance of basic color terms. *Language* 54: 610-646.

[論集などに所収の論文] 第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」編者名（編）『論文集名』頁数。出版地：出版社。

例 金田一京助（1955）「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説』下：727-749。東京：研究社。

例 上野善道（1997）「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫（編）『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』231-270。東京：三省堂。

例 Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171-202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

[単行本] 第1著者名・他の著者名（発行年）書名。（必要な場合は）版、（該当する場合は）シリーズのタイトルと巻号。出版地：出版社。

例 柴谷方良（1978）『日本語の分析』東京：大修館書店。

例 林四郎・南不二男（編）（1974）『世界の敬語』敬語講座第8巻。東京：明治書院。

例 Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

例 Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

(旧：続き)

[学位論文] 著者名 (提出年) 「論文名」学位論文の種類, 大学名.

例 南西太郎 (2005) 「南西語音韻論研究」博士論文, 南西大学.

例 Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

- ・ 欧文の著書・論文名は、それぞれ項目の頭文字（および固有名詞）のみを大文字とする。（ただし、ドイツ語の名詞のように慣例的に頭文字を大文字にするものは、それに従う。）
- ・ 邦文で執筆された単行本、論文を欧文論文で引用する場合は、上記の欧文文献の表記に準ずることとする。

例 Yamada, Yoshio (1908) *Nihon bunpoo-ron*. Tokyo: Hoobunkan.

以下にアルファベット順に配列した例を示す。

参考文献Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

服部四郎 (1976) 「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2-14.

Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

金田一京助 (1932) 『国語音韻論』東京：刀江書院.

金田一京助 (1955) 「アイヌ語」市河三喜・服部四郎 (編) 『世界言語概説』下: 727-749. 東京：研究社.

Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171-202. New York: Holt, Rinehart and Winston.Lakoff, George (1986a) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George (1986b) Cognitive semantics. Berkeley Cognitive Science Report 36.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.

南西太郎 (2005) 「南西語音韻論研究」博士論文, 南西大学.

Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.

Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

佐久間鼎 (1941) 「構文と文脈」『言語研究』9: 1-16.

柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京：大修館書店.

Trubetzkoy, N. S. (1971) *Grundzüge der Phonologie*. 5. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

(新：続き)

[学位論文] 著者名 (提出年) 「論文名」学位論文の種類, 大学名.

例 南西太郎 (2005) 「南西語音韻論研究」博士論文, 南西大学.

例 Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

・ 欧文の著書・論文名は、それぞれ項目の頭文字（および固有名詞）のみを大文字とする。（ただし、ドイツ語の名詞のように慣例的に頭文字を大文字にするものは、それに従う。）

・ 邦文で執筆された単行本、論文を欧文論文で引用する場合は、上記の欧文文献の表記に準ずることとする。また、書名、論文名にはできるだけ訳語をつける。

例 Yamada, Yoshio (1908) *Nihon bunpoo-ron*. [Japanese grammar]. Tokyo: Hōbunkan.

例 Kuroda, S.-Y. (1980) Bunpoo no hikaku. [Comparison between Japanese and English grammar]. In: Tetsuya Kunihiro (ed.) *Nichieigo hikaku kooza 2: Bunpoo*. [Comparative studies of Japanese and English 2: Grammar], 23–62. Tokyo: Taishukan.

以下にアルファベット順に配列した例を示す。

参考文献

Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.

Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

服部四郎 (1976) 「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2–14.

Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

金田一京助 (1932) 『国語音韻論』東京：刀江書院.

金田一京助 (1955) 「アイヌ語」市河三喜・服部四郎 (編) 『世界言語概説』下: 727–749. 東京：研究社.

Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171–202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Lakoff, George (1986a) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George (1986b) Cognitive semantics. Berkeley Cognitive Science Report 36.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.

南西太郎 (2005) 「南西語音韻論研究」博士論文, 南西大学.

Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37–120.

Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

佐久間鼎 (1941) 「構文と文脈」『言語研究』9: 1–16.

柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京：大修館書店.

Trubetzkoy, N. S. (1971) *Grundzüge der Phonologie*. 5. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

(旧：続き)

- ・ 本文および注における参考文献への言及は以下の要領に準じて行う。必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい。

例 この問題については、山田孝雄（1908）も論じているように……

例 山田（1908: 584）は、「助詞は単独にては何等の観念をもあらはし得ず、他の観念語に附属して始めて其の義を認むるを得るのみ」と言う。

例 Sapir (1925) notes that...

例 Bloomfield (1933: 347) remarks as follows: “The assumption that the simplest classification of observed facts is the true one, is common to all sciences . . .”

(新：続き)

- ・ 本文および注における参考文献への言及は以下の要領に準じて行う。必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい。

例 この問題については、山田孝雄（1908）も論じているように……

例 山田（1908: 584）は、「助詞は単独にては何等の観念をもあらはし得ず、他の観念語に附属して始めて其の義を認むるを得るのみ」と言う。

例 Sapir (1925) notes that...

例 Bloomfield (1933: 347) remarks as follows: “The assumption that the simplest classification of observed facts is the true one, is common to all sciences . . .”

例 In Optimality Theory (Prince and Smolensky 1993, Kager 1999),...

例 ... as often mentioned in the literature (Chomsky 1980, 1990, Bresnan 1990, 1991, Hale 1996).

(2011年11月改定)

第 143 回大会

期日 2011 年 11 月 26 日 (土)・11 月 27 日 (日)

会場 大阪大学 豊中キャンパス

公開シンポジウム 11 月 27 日 (日) 13:30 ~ 15:55

「活用論の前線」

活用形から見る日本語の条件節

語の活用論から述語の構造論へ

—日本語を例とした拡大活用論の提案—

分散形態論を用いた動詞活用の研究に向けて

司会 仁田 義雄

三原 健一

野田 尚史

田川 拓海

口頭発表

—第 1 日 (11 月 26 日 (土)) 13:00 ~ 18:00—

。A 会場

(A 1) 13:00 ~ 演算子移動の精緻化と連鎖形成

本多 正敏

(A 2) 13:35 ~ カクチケル語における項削除の可否について

大滝 宏一

杉崎 鉦司

遊佐 典昭

小泉 政利

前田 雅子

(A 3) 14:15 ~ 日本語における非顕在的 wh/focus 移動と Relativized Minimality

(A 4) 14:50 ~ TP 領域内の Focus Phrase : 日本語 wa 助詞に関する一考察

田中 秀治

(A 5) 15:40 ~ 日本語における名詞句の発達過程と機能範疇

團迫 雅彦

(A 6) 16:15 ~ 本当に 2 種類の to が存在するのか? —繰り上げの to と制御の to—

野村 忠央

(A 7) 16:55 ~ 否定の種類と統語構造

大関 洋平

(A 8) 17:30 ~ On the Highest Subject Restriction in modern Irish

Dónall P. Ó BAOILL

Hideki MAKI

。B 会場

(B 1) 13:00 ~ 統語操作と語彙的緊密性の関係について

西牧 和也

(B 2) 13:35 ~ 動詞的名詞の前に生起する名詞句のふるまいについて: 「NP の研究」対「NP 的研究」

大久保龍寛

坂本 暁彦

(B 3) 14:15 ~ 英仏日語における、否定疑問文に対する応答のゆれ

亀山里津子

(B 4) 14:50 ~ 現代日本語コ・ソ・アの二層的分析—現場指示系と観念指示系の分離とその帰結—

小川 典子

野澤 元

(B 5) 15:40 ~ 近接性を表す日英語の形容詞と前置詞と名詞の文法化についての統語的考察

小川 芳樹

(B 6) 16:15 ~ 身体部位名詞を伴う再帰表現の受動文とその認可条件

小栗 哲哉

(B 7) 16:55 ~ 英語結果副詞の事象完結一時取消機能について

鈴木 博雄

(B 8) 17:30 ~ 英語の動詞連続構文について

森下 裕三

。C 会場

(C 1) 13:00 ~ モンゴル語の主題に関する一考察—定義型主題を中心に—

サイシャラト

(賽希雅拉图)

(C 2)	13:35 ~	フィンランド語における出格補部の目的語性	太田 樹
(C 3)	14:15 ~	タラウド語における結果・継続アスペクトを表す接頭辞 UA- の分析—継続アスペクトとの相違—	内海 敦子
(C 4)	14:50 ~	インドネシア語における受動文としての ter- 構文の意味役割	リズキ・アンディニ
(C 5)	15:40 ~	古典ナワトル語の多重人称標示の形態統語論的解釈	佐々木充文
(C 6)	16:15 ~	アラビア語チュニス方言の条件文	熊切 拓
(C 7)	16:55 ~	日本手話の口型に見られる極性表現	松岡 和美 南田 政弘 矢野羽衣子
(C 8)	17:30 ~	日本手話の社会的ダイクシス	神庭真理子
。D 会場			
(D 1)	13:00 ~	「のだ」文と分裂文の派生再考	五十嵐啓太 志澤 剛 三上 傑 久保田一充
(D 2)	13:35 ~	「息子は明日運動会がある」構文—デキゴト存在文と「象は鼻が長い」構文のハイブリッド構文—	
(D 3)	14:15 ~	「が・の」交替に見られる Theme 主語と Agent 主語の非対称に関して	赤楚 治之 原口 智子
(D 4)	14:50 ~	動詞の項構造とニ/ニヨotte受身文	高井 岩生
(D 5)	15:40 ~	授受形式がもたらす発話内効力管理領域におけるポライトネス機能	横倉 真弥
(D 6)	16:15 ~	日本語の知覚動詞と認識動詞における文補語標識の交替について	佐々木 淳
(D 7)	16:55 ~	完了相を標示するテイタと証拠性表現との関連性	梅野由香里
(D 8)	17:30 ~	「V ナカッタ」と「V テイナイ」の弁別基準について：タイプ・フォーカスとトークン・フォーカスによる説明	都築 鉄平
。E 会場			
(E 1)	13:00 ~	語頭および母音間における平音・激音・濃音の音響的特徴—談話レベルにおける検討—	韓 喜善 (ハンヒソン)
(E 2)	13:35 ~	韓国語、タイ語および中国語話者による日本語閉鎖子音の VOT に関する考察	清水 克正
(E 3)	14:15 ~	上海語陽入声変調における変種の出現分布：形態統語構造との関連性	高橋 康徳
(E 4)	14:50 ~	カドゥー語における緊喉調について	藤原 敬介
(E 5)	15:40 ~	北琉球奄美湯湾方言のアクセント体系	新永 悠人 小川 晋史
(E 6)	16:15 ~	ノルウェー語 Sandnes(サンネス)方言のアクセント：アクセントの抽出とその弁別的特徴	三村 竜之
(E 7)	16:55 ~	アミ語の母音連続と挿入規則	今西 一太
(E 8)	17:30 ~	Affixes' selections of verbal stems/forms	Hiroki KOGA

。 F 会場

- | | | | |
|-----------------------------------------------------------|---------|-----------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| (F 1) | 13:00 ~ | オノマトペ音象徴の類像性と慣習性—韓国語擬態語の日本語母語話者による判断から— | 黒沢 晶子
崔 絢喆 |
| (F 2) | 13:35 ~ | 言語流暢性検査による音声語彙生成についての検討—英語, 日本語, アラビア語, タイ語における比較言語による分析— | 浅野 恵子 |
| (F 3) | 14:15 ~ | SO 語順選好は普遍的か?—カクチケル・マヤ語の聴解実験による検証— | 小泉 政利
八杉 佳穂
金 情浩
木山 幸子 |
| Lolmay Pedro GARCÍA MATZAR
Juan Esteban AJSIVINAC SIÁN | | | |
| (F 4) | 14:50 ~ | 日本語ガーデンパス文における処理負荷と初分析理解保持の関係性 | 中村 智栄
新井 学 |
| (F 5) | 15:40 ~ | 複合名詞と複合述語文: 日本語を母語とする幼児の縦断的観察研究 | 中谷 友美 |
| (F 6) | 16:15 ~ | 多重指定部パラメーターと Φ 素性構成: SLA の観点から | 石野 尚 |
| (F 7) | 16:55 ~ | 格標識付き stripping 構文における照応の理解過程—事象関連電位を用いた研究— | 伊藤 益代
備瀬 優
矢野 雅貴
坂本 勉 |
| (F 8) | 17:30 ~ | fMRI を使用した日本語の「自分」を含む文の処理に関わる脳活動報告 | 上田由紀子
中村 和浩
橋本 洋輔
内堀 朝子
豊嶋 英仁
木下 俊文 |

。 G 会場

- | | | | |
|-------|---------|---------------------------------------------------|-------------------|
| (G 1) | 13:00 ~ | 他動性の観点から見た現代韓国語の「漢字語 + hada/doida」動詞について | 高地 朋成 |
| (G 2) | 13:35 ~ | 韓国語の「-n kes-ita」文の当為性に関する一考察—「-n pep-ita」との比較を含め— | 李 英蘭 |
| (G 3) | 14:15 ~ | 韓国語と日本語東北方言の非動詞の時間表現 | 高田 祥司 |
| (G 4) | 14:50 ~ | 比較相関構文におけるホ下の構造と解釈 | 東寺 祐亮 |
| (G 5) | 15:40 ~ | 日本語文産出過程における動詞決定の時期—健常者の自発話に見られる助詞の言い誤りをもとにして— | 井原 浩子 |
| (G 6) | 16:15 ~ | Shifty operators in Dhaasanac | Sumiyo NISHIGUCHI |
| (G 7) | 16:55 ~ | 中国語複合動詞の分類再考—語彙的アスペクトの観点から— | 青柳 宏
張 楠 |
| (G 8) | 17:30 ~ | 後置量子の意味解釈 | 田中 拓郎 |

ワークショップ

—第2日 (11月27日 (日)) 10:00 ~ 11:40—

ワークショップ1 (A会場)

「多言語使用—グアテマラの挑戦—」

企画・司会 小泉 政利
 グアテマラの多言語政策とカクチケル語におけるそ
 の具体的取り組み 八杉 佳穂
 標準語化への道—カクチケル語の場合—

Lolmay Pedro GARCÍA MATZAR

カクチケル語の完了相

Juan Esteban AJSIVINAC SIÁN

ワークショップ2 (B会場)

“Noun phrases in Japanese: Syntactic dependencies and interpretations”

Organizer and Chair

Masao OCHI

Classifiers and plural/collective elements in the nominal
 domain Masao OCHI

On the internal-structure of the accusative WH-adjunct Yoichi MIYAMOTO
Nani-o and its implication for Adjunct Condition
 effects: A preliminary study

“Arbitrary” zero pronouns revisited

Satoshi OKU

ワークショップ3 (C会場)

「使役構文の意味とその拡張—責任の言語学に向けて—」

企画 長谷川明香

司会 西村 義樹

コメンテータ 鷲尾 龍一

日本語の非典型的な語彙的使役構文

長谷川明香

タガログ語の *pa-* 使役構文と責任

長屋 尚典

シベ語の動詞接尾辞 *-we* の多機能性と責任

児倉 徳和

ワークショップ4 (D会場)

「等位構造研究の新視点」

企画 依田 悠介

司会 松原 史典

等位構造を導く等位接続詞の発達と文法化

依田 悠介

移動分析による二重目的語構文の派生と等位構造制
 約

玉木 晋太

等位構造内での構文交替—データとその理論的示唆—

工藤 和也

ワークショップ5 (E会場)

「日本語と中国語の類別詞に関する認知言語学的考察」

企画・司会 陳 奕廷

コメンテータ 西光 義弘

近年における日本語類別詞の意味構造と体系の変化

吉田 康代

松本 曜

日中両言語の類別詞の使用における全体性の影響

游 韋倫

夏 海燕

日本語と中国語の借用類別詞の形成メカニズムについて	陳 奕廷
類別詞の意味拡張パターン—日本語・中国語間にみられる異同—	史 春花 吉田 康代

ポスター発表

—第2日 (11月27日(日)) 11:45～13:00— (B棟2階ホール)

日本人とトルコ人大学生の個別外来語に対する受容意識について	TOKSOZ Levent
アイヌ語における受動文の主観性	FREGUJA Fulvio
Reflexivity: Semantic extension of English spatial particles and Japanese motion verbs	Ashlyn MOEHLE
非項要素の後置：機能と構造	綿貫 啓子
統語構造が認知傾向に及ぼす影響について—眼球運動測定による検証—	田島 弥生 石崎 俊 福田 亮子
動詞性名詞と機能動詞「する」の共起について	佐藤 佑

日本語学会 2012～2014 年度役員選挙の結果について

2012～2014 年度役員（会長，編集委員長，会計監査委員，評議員）の選挙を，会則・選挙規則および選挙細則に基づいて，以下の日程で行った。

- 2011 年 11 月 22 日（火）選挙人名簿発送
- 2011 年 12 月 21 日（水）投票用紙発送
- 2012 年 1 月 20 日（金）投票締め切り（当日消印有効）

開票は下記の選挙管理委員会で行われた。

- 日 時：2012 年 1 月 29 日（日）11:00～16:00
- 場 所：国立国語研究所セミナー室
- 出席者：影山太郎（選挙管理委員長），相澤正夫，荻野綱男，風間伸次郎，杉浦滋子，砂川有里子，長谷川信子，鷺尾龍一（選挙管理委員）
- オブザーバー：井上 優（事務局長），高田智和（事務局委員）

開票結果は以下の通り

投票総数	146	うち有効投票数	143
		無 効	3

1. 会長選挙

投票総数	143	うち有効投票数	140
		白 票	2
		無 効（白票を除く）	1
当 選	梶 茂樹	27 票	
次 点	田窪行則	23 票	
次々点	角田太作	9 票	

2. 編集委員長選挙

投票総数	143	うち有効投票数	126
		白 票	13
		無 効（白票を除く）	4
当 選	林 徹	15 票	
次 点	松本 曜	10 票	
次々点	吉田和彦	9 票	

3. 会計監査委員選挙

投票総数	280	うち有効投票数	247
		白 票	15
		無 効（白票を除く）	18
当 選	井上 優	21 票	
当 選	金水 敏	11 票	
次 点	吉田 豊	8 票	
次々点	長谷川信子	8 票	

4. 評議員選挙

選挙細則に基づき、当選者のみを各地区別に五十音順に掲げる。

[北海道] (定数2名) 加藤重広, 佐々木冠

[東北] (定数3名) 小野尚之, 小泉政利, 後藤 斉

[関東] (定数29名) 伊藤たかね, 井上史雄, 上野善道, 遠藤喜雄, 大津由紀雄, 大堀壽夫, 生越直樹, 尾上圭介, 影山太郎, 風間伸次郎, 菊地康人, 木村英樹, 窪園晴夫, 坂原茂, 砂川有里子, 高見健一, 滝浦真人, 角田太作, 中川 裕, 西村義樹, 西山佑司, 長谷川信子, 林 徹, 早津恵美子, 日比谷潤子, 福井直樹, 松村一登, 峰岸真琴, 鷺尾龍一

[中部] (定数10名) 北野浩章, 呉人 恵, 佐久間淳一, 澤田治美, 清水克正, 玉岡賀津雄, 柘植洋一, 堀江 薫, 町田 健, 油谷幸利

[近畿] (定数16名) 工藤真由美, 郡司隆男, 定延利之, 佐藤昭裕, 庄垣内正弘, 沈 力, 田窪行則, 田野村忠温, 野田尚史, 藤代 節, 益岡隆志, 松本 曜, 三原健一, 山梨正明, 吉田和彦, 吉田 豊

[中国・四国] (定数5名) 桐生和幸, 酒井 弘, 塚本秀樹, 辻 星児, 和田 学

[九州・沖縄] (定数5名) 青木博史, 上山あゆみ, 江口 正, 久保智之, 坂本 勉

なお、梶茂樹氏(近畿地区)、井上優氏(関東地区)、金水敏氏(近畿地区)は評議員当選に足る票数を得たが、それぞれ会長あるいは会計監査委員に就任のため、兼任禁止規定により評議員とはならない。これに伴い当該地区で繰り上げ当選が生じた。

◇退 会

国内通常会員 8名
国内学生会員 1名
在外通常会員 1名



◇本学会の委員（現評議員）、常任委員、編集委員、CIPL（Comité International Permanent des Linguistes）委員を務められた長嶋善郎氏は、2011年9月7日に逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。